



『ピチクル ピチクル』(童心社) 原画
油絵具を使った木版画。虫たちの営みを色彩豊かに表現。

語り切れない深い想いを彼の絵の中に感じる。その想いのベースのひとつに、彼が結婚以来多くの日々を送っている藤野の地に着目したい。『ピチクル ピチクル』(二〇〇一)には、彼が絵本向けのイラストレーション以外に試みてきた仕事の一端が垣間見える。絵肌の独特の魅

力と共に、藤野の森に棲むものたちへの西村のやさしい眼差しを思いつき感じてしまい、泣きそうになってしまふ。彼の弱いものたちへの愛は、こんなカタチで絵本の中にアートの世界を育くもうとしている。

(絵本作家・アーティスト)
〈文中敬称略〉

井伏鱒二 関連資料管見

勝又 浩

館所蔵の井伏鱒二関連資料の一端を見せてもらった。資料は何しろ関連図書だけでも二八七

点、そして圧巻は直筆原稿や手入れのある切り抜きなどの資料一三四〇点である。それらは井伏鱒二没後二一年かけ、五回に分けて井伏家から寄贈された。整理されたご遺族の苦勞も想像されるが、このたび館の方の整備体制も整って閲覧が可能になったということである。私はもとよりそれらの全てに目を通すわけには行かないから、あらかじめ送っていただいたリストによつて目星をつけておいて、それらを中心に見せてもらうことにした。しかし、いざ現物を前にしてみると、そんなメモなどたちまち吹き飛んでしまつて、玉手箱を開ければ次々に現れる神秘のお宝に思わず時を忘れてしまったのである。以下、そのときの驚き、感激を、スペースの許す限り報告したい。

まず興味の一つは直筆原稿類で、これは、そのなかには「故篠原陸軍中尉」一二九枚のような大部なものもあるが、資料全体の割合からすると案外数が少なく、複写も含めて一九点である。井伏鱒二の消しや書き入れの様子を見た

「コロボツクル物語」の作者 佐藤さとるの自伝小説

コロボツクルに出会うまで

自伝小説 サットルと『豆の木』

佐藤さとる 著 村上勉 装画

262ページ 定価 本体1800円(税別)



偕成社

TEL: 03-3260-3221 FAX: 03-3260-3222
www.kaiseisha.co.jp

くて私も何点かを広げて楽しんだが、こんなことをしていると時間がいくらあっても足りない。ただ、ここには自筆原稿の他に彼のコレクションだった正宗白鳥や室生犀星他の直筆原稿もあって、それらも余得のように楽しんだ。そして、井伏鱒二の書風は犀星のそれに似ているかもしれない、とは今回の楽しい発見であった。なお、井伏鱒二は志賀直哉の直筆原稿を手に入れて眺めていたとエッセイに書いていたが、それらも志賀原稿は見つからなかった。

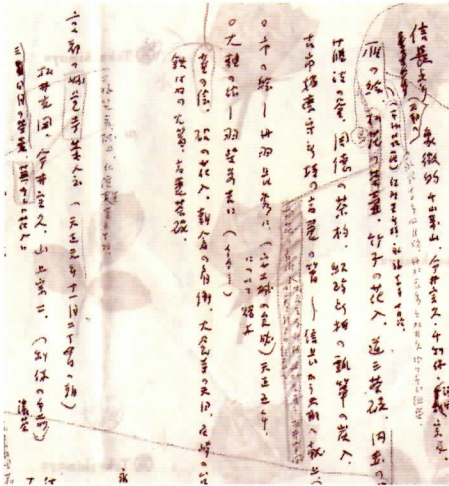
直筆原稿に準じて興味深くまた重要でもある手入れ跡のある切り抜き類が七三点。これらは既に単行本に反映されそれが全集に採られていれば用済みと言ってよい資料ではあるが、そのこと自体の確認だけでもこれからの大きな研究課題である。今回の資料覗きから分かったなかでもこんな問題があった。

新聞や雑誌の切り抜きがほとんどのなかで一冊丸ごとの著書『追剥の話』（昭和22年4月、昭森社）があった。「へんろう宿」など五編を取めた短編集であるが、そのなかの表題作「追剥の話」だけに数ページにわたる削除や、逆に余白ページを使った大幅な書き加えなど大小の書き込みがあつてびっくりした。当たつてもらうと、この単行本を底本としたと断わっている全集にもこれらのことは反映されていない。結局、書き加えの冒頭にあつた日付から、これがラジオ放送用の縮約版だろうと推測、実際に昭和二三年三月二二日、午後七時三〇分から、NHK第二放送に「追はぎの話 井伏鱒二他」とした番組があつたことを、この日、私に付き合

つてくれた職員が突き止めてくれた。とすれば、これは小説「追剥の話」の別バージョンだと考えてよいであろう。ちなみに記しておけば、このラジオ放送のことは全集版の詳細な年譜にも記載されていない。今度の資料覗きのなかで収穫の一つだった。

直筆資料としては他にデパートの、送り主のラベルが張り付いたままの大きな包装紙、その裏にいつぱいに書かれた創作メモがあつて面白かった。明らかに信長関連の年表事跡などであるが、「かるさん屋敷」などにかかわるだろうか。ちよつとしたメモのつもりがどんどん膨らんでいったのかと想像すると興味が尽きない。

以上は井伏鱒二の筆跡の残る資料についての例であるが、遺品中のお宝としてはもう一つ、たくさんの来簡類がある。それは五十音順のリストに従えば青木楠男（南八の兄）、青柳瑞



井伏鱒二 創作メモ（部分）

穂から始まって吉田健一、吉田絃二郎まで、文学関係者に限つても八一三通である。太宰治の一一通は当然だが、なかには三浦哲郎の六四通、永井龍男の三二通などダントツに多い人から、数は少ないが川端康成や尾崎士郎の軸装された書簡も交じっている。川端書簡は、後に毛筆巻紙のものもあるのに、古いペン書きの方を封筒と合わせて表装しているのは、それが初めて受け取った手紙であつたからだろうか。あるいは、一三通ある小林秀雄の書簡、そのなかには浅草の待合に一〇円送つておいてくれという依頼文（昭和7年8月）などがあつて彼らの交流ぶりが見えて面白い。仲間たちと遊んだ付けが回つて来て困つたのだろう。今自分には金がなくて払えない、「今小説を書いてゐる」ともある。「Xへの手紙」を書いている頃だろうか。

書簡類でも一つ思いがけなかったのは、そこに井伏自身の手紙が一四通含まれていたこと。すべて伴俊彦宛だが、井伏自身が伴俊彦コレクションを一括買い戻した際に含まれていたのだろう。そのうち初版本コレクションの方は早大の図書館に寄贈したということだ。井伏関連資料は、青木正美『肉筆で読む作家の手紙』（平成28年）によれば、古書業界の「最後のスター」、「生前これほどに高価に取引された作家はなかった」そうだが、井伏関連資料によって文学館の価値も数段上がったかもしれない。

その他、残された一枚の領収書から戦後の出版史の一コマが覗けたような例など、話は尽きないが既に紙面が尽きた。

（法政大学文学部名誉教授）